

インクルーシブ教育の良さ

北原 幸

見学して気づいたこと

問題行動が多い長男の小学校入学にあたり、まず、校長先生に息子のことを説明しておくことが必要と思いました。そこで学校の始まる数か月前に息子と共に先生と面談することになりました。

これまでの出来事、心配話を話すと、「学校にはいろいろな子どもたちがいて、私も様々な子どもたちと接してきた経験があるので任せて頂いて大丈夫です。全ての子どもたちに学校で学ぶ権利があるのですから。問題が発生した場合はその都度、その都度解決方法を考えていきましょう」という言葉を先生から頂きました。そして、面談後、私は学校の様子を見学しました。

小さな平屋建ての校舎をぐるっと一周し、気づいたことがありました。

そこで、校長先生に「授業中なのに教室の外で腕立て伏せをしている子と腹筋をしている子を見かけたのですが、あれは何かの懲罰でやらされているのでしょうか？」と問うと、先生は少し笑いながら「懲罰なんてありませんよ。外で軽い運動をしていた子は長時間教室でじっとしているのが苦手なのでしょう。そういう子は先生に許可をもらい軽く運動して、自分が落ち着いたら、また教室に戻るんです。私は先生方を信じているので、先生方がどんな風に授業を進めているか細かいことは聞きませんが、そういうことだと思います」とおっしゃいました。

「教室の外に机をだして、プリントを解いたり、作文を書いたりしている子どもたちも見かけたのですが、あの子達はどのようにして教室で授業を受けていないのですか？」この質問には「子どもの中には教室のざわざわした雰囲気の中、後ろの子の鉛筆や消しゴムの音が気になり集中できない子もいるんです。きっとそういう子が担任に許可をもらって、教室の外でテストを受けたり、作文を書いたりしているのでしょう」という答えが返ってきました。

障害のない定型発達といわれる子ども達だって、全員が同じ訳ではないのです。大多数の子ができることが、できなかつたり、苦手だつたり、障害とまでは呼べないまでも様々な個性がある子がいるのです。極度な近視があり、裸眼では黒板の字が読めない子も眼鏡という道具を使うことにより当たり前学校生活を送ることが出来ます。ハンディがあつてもそれを補う環境を作つたり、道具を使用することで「普通」に過ごすことが出来る。

「当たり前前を当たり前」が実現できるように環境を整えるノーマライゼーションが自然にできている学校を見学し、この学校なら重度な障害のある息子も受け

入れてもらえるかもしれないと、少し希望が持てました。

世の中には様々な人がいる

学校についての話をもう少し続けたいと思います。カナダには基本、支援学校が存在しません。小学校の間は支援学級もなくインクルーシブ教育が行われます。とは言っても、うちの子の様に重度の知的障害のある子が皆と同じ授業を受けて理解できるはずもありません。そこでIEP(個別教育計画・個別の指導計画)が作られ、補助員が付き教室内でIEPに沿った指導が進められます。例えば、皆が算数で足し算の練習をしている時、うちの子は補助員に教え方を教えてもらう。皆が読書感想文を書いている時に単語の書き写しをする等。ただ、学年が上がるにつれ、勉強の内容に大きな差が出てくるので、インクルーシブ教育と言っても、実際には障害児と定型発達児では全く違う勉強をすることになります。それでも、インクルーシブ教育には良いところがあります。それは、定型発達の子達が障害者を理解することが自然にできるという点です。定型発達児が障害児を理解しても、定型発達児には何の利点もないという人もいます。そうでしょうか？世の中には様々な人がいます。自分よりいろいろなことができる人、自分の助けを必要とする人、自分とは違う考えを持つ人、意地悪な人、優しい人、老人、赤ちゃん・・・社会に出れば色々な人と関わりながら生きていかなければなりません。子どもの頃から障害児と関わることにより、自分とは全く違う人がいることを知ることになります。そして、自分と全く違う人との接し方を身につけることができます。



別に気にすることじゃないよ

これは次男Kが2年生の頃、当時担任だった先生から聞いた話です。ある日、Kが授業中、突然奇声を上げ、教室中がびっくりして一瞬凍りついた状態になったそうです。その時ある女の子が「皆どうしたの。私達だって、緊張したときやイライラした時、色んな癖がでるでしょ。貧乏ゆすりをする人、髪をいじる人、爪を噛む人、瞬きをたくさんする人、Kが声を上げるのは、それと同じなんだよ。だから、別に気にすることじゃないよ」と発言、他の生徒たちも理解、納得して教室でのKのちょっと不可解な行動も意に介することなくスルーできるようになったそうです。「子ども達の方が私達大人よりも、ずっと自然に障害を理解し、共に学び生活していくということを知っている」と、先生は子ども達に教えられた気がしたそうです。